信仰組織と部落構造

——長崎県南松浦郡奈留町大林部落の例——

倉田和四生

1 はじめに

本稿は長崎県南松浦郡奈留町大林部落の調査研究報告の一部である。その主たる目的は

① 大林部落の「かくれ切支丹」の組織を明らかにし，これを他地区の「かくれ切支丹」と比較研究すること。

② 大林部落に於いて，「かくれ切支丹」の組織が部落の他の側面，例えば経済組織や部落会とどのような関連にあるかという問題。

③ 分析方法として構造機能分析の図式の適用を試みたことである。

最初，具体的分析に入いる前に**分析の枠組**について簡単に述べてみよう。

社会システム「社会」は行為者を単位とする相互依存の体系であり相互作用の体系であるから，「社会」を「社会システム」として捉えていることが，第一の前提となる。

二つの命題，次に社会システムを分析する際の主要な分析の視点を明らかにしておこう。まず我々は社会システムに関する二つの命題をもっている。その一つは，「社会」は二つの（タイプの）部分に分化する傾向があるというものである。第一のタイプは具体的サブシステムである。これは具体的経験的に区別することの出来る社会的単位である。第二のタイプは分析的サブシステムである。これは経験的，物理的には区別することの出来ない，分析的に区別された，抽象的システムである。例えば「家族」，「商社」，「政党」は具体的システムであるのに対して，「経済」，「政治」等はそれ自体では具体的システムではなく，その機能である。機能としての「経済」はあらゆる具体的単位に含まれているにもかかわらず，それのみでは決して具体的単位たり得ないし，家族は一個の小さな具体的システムであるにもかかわらず多くの機能を同時に充さなければならない。

次に第二の命題は，「社会」が維持されるためには，四つの機能的問題，即ち「適応」，「目標達成」，「統合」，「型相維持」の四つの機能を解決しなければならないということである。これら四つの機能的問題は，それぞれの問題を解決するために四つの機能的サブシステムを構成する。即ち「経済サブシステム」，「政治サブシステム」，「型相維持サブシステム」，「統合サブシステム」である。これら四つが社会の機能的サブシステムである。二つの命題を合わせて理解すると次のように図示される[1)]。

第1図 社会システムの分化

社会システム
- 具体的システム
- 機能的，分析的システム
  - ①適応サブシステム
  - ②目標達成サブシステム
  - ③統合サブシステム
  - ④型相維持サブシステム

構造機能分析の手続き 次に本稿に於ける構造機能分の手続きを簡単に述べると，まず全体としての部落（社会システム）の

(a) 具体的サブシステムの摘出及び社会関係の展開の論理の究明

(b) 次に各サブシステムの構造分析として

① 組織の役割内容の検討

② 規制的規範の究明

(c) 更に機能分析として，これらの具体的サブ

システムの主要な機能を明かにする。

(d) 次にこれらの具体的サブシステムと四つの機能的サブシステムとの対応関係を明らかにする。これによってこの部落の機能分化の程度を明らかにし，部落の特徴を知る。

(e) 最後に四つの機能的サブシステムの機能連関を（部分的に）明らかにする。

（但し本稿に於ては紙幅の関係上(c)まで取り扱かった。以下は，次稿で述べる。）

1) T. Parsons., Ecomomy and Society. 1961.
T. Parsons., Working paper, 1960.

2 調査地点・奈留町大林部落の概要

これまで一般的な分析の枠組について述べてきたが，次に本調査に於ける具体的な分析の手続きを箇条書に示すと，

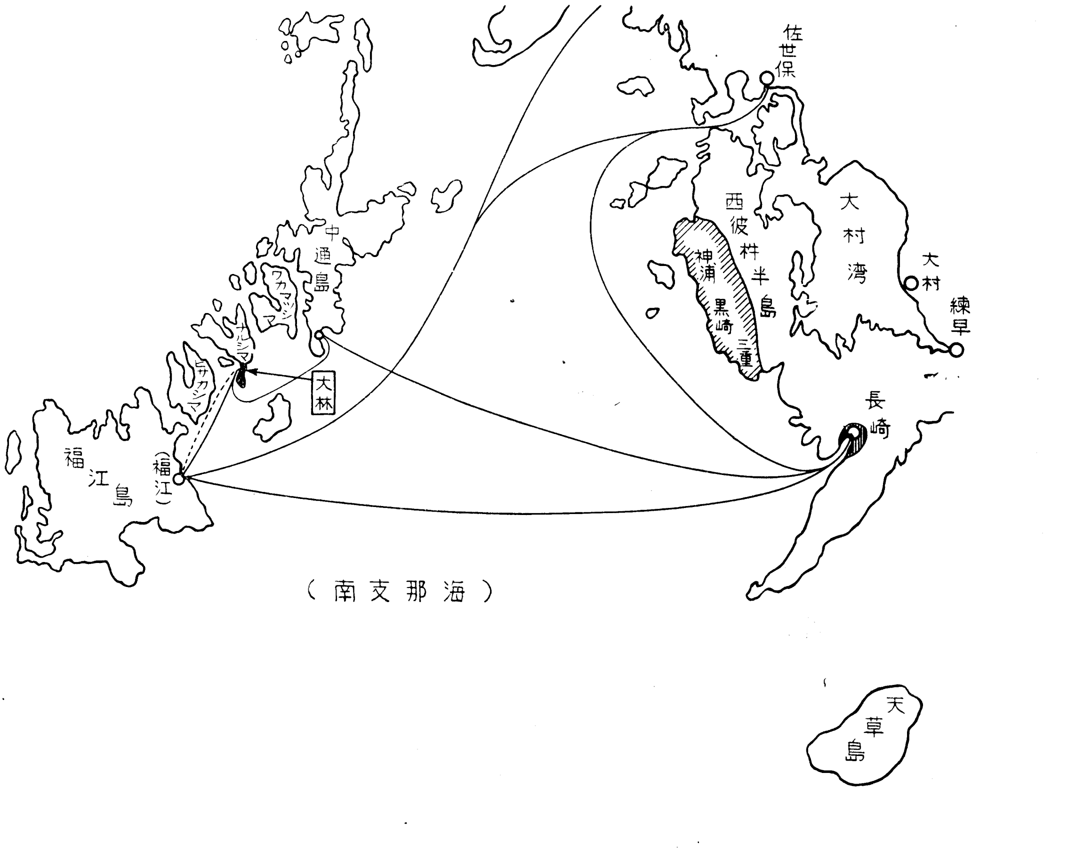
(1) 調査地点・奈留町の位置と概略
(2) 大林部落の概要
　1. 歴史的背景　2. 人口
3. 社会関係の展開と部落構造
(1) 社会関係の展開
(2) 部落の特徴と部落構造
4. 大林部落の宗教
(1) 大林部落のかくれ切支丹
(2) 大林の諸宗教
5. かくれ切支丹組織（帳）の構造
(1) 教義の変容
(2) 切支丹の組織
(3) 儀式と役割及びその変容
6. 規範と統制の機能
7. 組織の地方的変容と比較研究
8. む す び
9. 家族及び親家の構造
10. 郷の構造
11. 共同網の構造
12. サブシステムの機能連関
（尚 9以下は次の機会に取扱う予定である）

以下，順に述べていく

(1) 奈留町の位置と概略

調査地・大林部落は「長崎県南松浦郡奈留町大字大林」である。南松浦郡五島は長崎県西彼杵半島の南西海上に浮ぶ五つの主要な島から成立っているが，その中央部に位いするのが奈留町である。（第二図参照）本土との交通は福江・奈留尾

第２図　五島略図



経由で長崎・佐世保・博多と航路が通じている。奈留町は昭和32年11月3日に町制を施行した，人口約9,000の農漁村である。（第一表参照）

主なる産業は漁業と農業であるが，農業は自家消費にも満たない，小規模経営にすぎないが，漁業は水産県長崎でも屈指の漁場として有名である。過去3年間の漁獲高を示すと第二表のように成る。次に大林部落の概要をみておこう。

第1表　奈留町人口　　S.33

人　　口	8.998
方　粁　当	177
戸　　数	1.843
連タン状態	1.318
全体にたいする割合	7割
人口増加率	22%

第2表　奈留町漁協取扱実績

品目 \ 年度・数量		昭和30年度 数量	昭和30年度 金額	昭和31年度 数量	昭和31年度 金額	昭和32年度 数量	昭和32年度 金額
生鮮魚介類	いわし	129,026〆	13,662,772円	1,162,244〆	120,293,042円	1,753,467〆	151,733,127円
	ぶり（雑魚）	19,320	7,456,686	35,302	19,014,299	20,745	10,007,046
	海藻	7,980	1,657,906	4,155	1,578,557	10,922	2,940,763
	小計	156,326	22,777,364	1,201,701	140,885,898	1,785,134	164,680,936
加工品	煮干いわし	134,732	41,774,317	383,040	117,038,748	449,913	168,685,410
	煮干きびな	83,411	15,921,356			114,715	4,265,240
	するめ			646	641,951	115	132,794
	小計	218,143	57,665,673	383,686	117,680,699	464,743	173,083,444
合計		374,469	80,443,037	1,585,387	258,566,597	2,249,877	337,764,380

(2)　**大林部落の概略**

歴史的背景　長崎県の外海地方には

〝五島へ五島へと皆，ゆきたがる

五島はやさしや土地までも〃

と云う俗謡が伝えられているが，これは単なるフィクションではなく，寛政年間以降，長崎外海地方から五島へ大量の農民の移住が行われた史実が歌い伝えられたものである。ここで取扱おうとしている「奈留町大林部落」も，実はこの歌の背後にある史実に深い関連をもっている。まずこの俗謡の背後にある史実を明かにすることによって大林部落の歴史的背景の概略をつかむことが出来るであろう。

長崎県の外海地方（現在の黒崎村，三重村，神浦村）は大村領と佐賀領に二分されるが，大村藩では，寛政9年（1797年）以降，五島各地に向け，大量のキリシタン農民の移住が行われた[2)]。（大村藩は周知の通り，大村純忠以来，領民のほとんどがキリシタンであった）。その理由は，次の二つであるとされている。

第1は，大村藩が，人口制限策として二男以降の間引政策をとったので，堕胎を大罪とするキリシタン達にとっては耐えがたい苦痛であったこと。

第2は，大村藩は大村純忠以来領民のほとんどがキリシタンであったところから，キリシタンの弾圧がひどかったこと。ところがこのような悪条件が重なって苦しみぬいていたキリシタン達に，突如として福音がもたらされた。それは五島の領主から大村氏にたいして開拓農民1,000名の移民を受入れたいという申込みが到着したからである。自由の天地を夢み，信仰の自由を夢みて，キリシタン農民達は競って移住を開始した。彼等は五島の各地に分散して島の開発に協力し，自からの自由の天地を建設していったのである。大林郷も正しく，この自由を求めて渡ったキリシタン開拓農民の後裔なのである。ただ大林部落の草分け達が大村領（現在の神浦・三重・黒崎）のどこか

ら来たものであるか，何年に渡航したものであるかについての確実な証拠はない[3)]。ただこれをほぼ確実なものとして推測させるものとしては史的文献の外に，いくつかの事実や伝承がある。

(1) 五代前に大村のキリシタンが4人の子供をつれて来た。

(2) 4人の子供は成人して分家して次第に増加したのが大林郷である。4つの本家は，福島・大脇・浜村・溝田家である。（溝田は後年樺太に移住した）

(3) 大林郷字大林に草分けの4人に等分に分けた開墾畑が現存しており，部落民はすべてこの歴史的事実を知っている。

(4) 移住の際大村の殿様から「御墨付」をもらって来たが大林郷に定着する際，当時の村役人にあずけたままに成っている，と伝えられている。

以上の伝承を先の文献と合せ考えるとき，大林部落への移住・定着の事実を推定することが出来る。ところで，大林のキリシタン農民達が，五島奈留島に定着した当時，無人の島であったわけではなく，既に先住民が1657年ごろから定着していた。当時，先住民達は港が良く，漁業に便利で，然も土地の生産性が比較的高い地域を占取していた。従って後続の開拓民達は勢い不便な避遠の地に定着することを余儀なくされた訳である。然もキリシタン農民自身，自己の秘密を維持するためにも遠隔の地を好んだのであろう。現在でも尚前住民達を **地の人** 又は **ジゲ** と呼び移住キリシタンを **開き** 又は **居着き** と呼んで区別している。宗教的に見れば，前者は純粋な神道又は仏教徒であり，後者は〝かくれ切支丹〟である。この様に単なる後続の開拓民たるにとどまらず，彼等は異端の信仰を秘密に守る異質的な文化をもった特異な存在であったため，二つの社会は最初から強い差別意識が存在していた。戦前までの趨勢は勿論「地下」の優位と「開き」の劣勢をかこって来たが，近来は必ずしもこのような評価が通用しない面があらわれて来た。戦後の民主化の普及，滲透によって，切支丹達もこれまでのマイノリテー意識を捨てて，権利を大胆に主張し始めたことと相まって，何よりも重要な点は切支丹人口が既に「地下」の人口を上廻っており，これを強く自覚していることである。彼等の発言は年ごとに強く成っていく。更に経済的に見れば，大林部落などの切支丹部落の共同網が，〝地下〟の共同網よりも大いに成功したため「地下」と「開き」と経済力の差が除々にせばまり，今や逆転しつつある。又戦後「信仰の自由」が益々強調され，滲透するにつれ信仰上の差別も除々に消滅しつつある。然しながら，これまでの長い間続けられた差別意識は一朝一夕にして消し去ることは出来ないであろう。

人口構成・転出—転入・出稼・通勤・通学・職業別人口構成・交通通信

戸　数　56

人　口　353[4)]

第3表　（小字別人口）　4)

戸数　男女	戸　数	男	女
弁天浦	4	9	12
大林	16	48	47
口の夏井	18	62	75
浜泊	7	17	26
舅ヶ島	11	28	29
計	56	164	189

第4表　（年令別・性別人口構成）

性 年令	男	女	計
0—10	56	72	128
11—20	33	34	67
21—30	15	18	33
31—40	18	28	46
41—50	15	15	30
51—60	12	7	19
61—70	5	3	8
71—	4	7	11
計	158	184	342

転出・転入は家族単位のものをのぞけば短期間の出稼のための転出入である。転出は主として漁

第5表　（転出・転入）

年度	転　出	転　入	備　　考
27	男 15 女 8		1家族県内へ転出
28	男 5 女 2		2家族が浦郷へ転出
29	男 5 女 10		1家族福江市へ転出
30	男 18 女 3	男 10 女 7	1家族浦郷 1家族佐世保）より転入
31	男 4 女 8	男 12 女 4	1家族鹿児島へ転出
32	男 7 女 5	男 6 女 2	
33			1家族福岡県 1家族長崎）へ転出

夫の季節出稼，女は女中・女工その他の出稼が主である。1家転出は他に本籍地があって一時的に大林に寄留していたもの，又は他から嫁をもらいその縁で他出したもの。1家転入は大林に肉親が居住しているものにかぎられる。

出　稼

他町村への出稼総数は23名現住人口にたいする比率 6.7%　男9（漁夫）　女15（のり養殖工）

第6表　（出稼先）

性別＼出稼先	隣接郷	郡内	県内	県外	計
男	0	7	2	0	9
女	1	3	2	9	15

第7表　（年令別）

年令＼数	数
0—20	10
21—25	10
26—29	1
30—	3
計	24

第8表　（出稼経験者）

出稼先	隣接村	郡　内	県　内	県　外	計
数	9	12	11	16 （国外1）	48

第9表　（職種別）

漁　夫	のり養殖	工　員	女　中	炭坑夫	その他	計
21	4	11	4	3	5	48

第10表　（期間）

1年以内	1～5年	6～10年	11年以上	不　明	計
16件	17件	7件	6件	2件	48

通勤・通学

通勤は部落外3名（中学教員1名，病院職員1名，看護婦1名）

通学　小学生（男39名・女37名）
　　　中学生（男6名・女12名）
　　　上級学校　若干名

第11表　（職業別人口構成）（世帯主の主たる職業）

職業	漁業	漁類加工業	農業	公務員	大工	無職	計
数	45	2	4	1	2	2	56

第12表　（職業別人口構成）（世帯主の主たる職業）

職業	漁業	農業	漁類加工業	大工	看護婦	石屋	地方公務員	菓子屋	無職	計
数	83	19	13	4	1	1	1	1	5	127

以上の表から明かなように，この部落の主要な産業が漁業であることは明かである。従って大林部落の経済が漁業で支えられていることも又当然である。これには，漁業の外加工業も加わるから漁業関係の占める比重は圧倒的であるといえる。次は農業であるが，部落全体でわずか田3段3

第13表

山林	
1段未満	32
1段～3段	3
3段～5段	1

第14表

耕地所有段別　（畑）	
3段未満	34
3段～5段	7
5段～	2

第15表

原野	
1段以上	1
1段以下	12

畝，畑5町6段9畝　であるので自家消費にも満たない。奈留町の農業協同組合は採算が立たず事実上機能していない。代りに畜産組合が，これを代行している状態であるので漁業に比して問題に成らない。

外部との交通通信

奈留町浦郷からの陸路交通は車馬の交通可能な道路は部落の入口のところでストップ，それ以外の道は，1.5米以下の車馬の通行不能な人道があるのみで全くの孤立状態。これを補うものとしてはむしろ海路の方が発達している。動力船は部落全部で12隻ありその外に無動力船が2戸に1戸の割にあるから海路の交通は発達している。重要な集団的送迎はすべて海上輸送にたよる。

郵便物は引受・配達とも1日平均15通位いで，他の郷よりも少ない。

マスコミの普及についてみると，新聞をとっている家族17戸（長崎日日14，西日本2，毎日1）ラジオは28戸で丁度半分，ラジオが比較的に普及しているのは，漁村であるため，天気予報を知るのに最も好都合であることと同時に重要な娯楽源でもある。

2）片岡弥吉著　長崎の殉教者　185頁
田北耕也　昭和時代の潜伏キリシタン　59—60頁

3）田北氏によって黒崎地方に残る「天地始之事」が五島でも発見されているが，これも，五島と黒崎の関係を示しているといえる。
田北耕也　昭和時代のかくれ切支丹　第二章

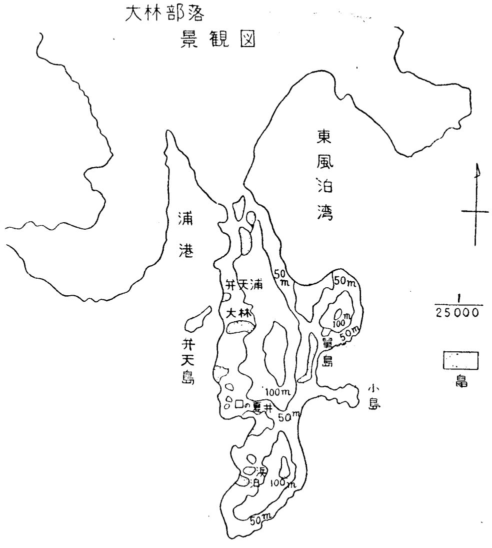
4）第3表—第15表は，昭和33年4月現在の奈留町役場の資料による。

3　社会関係の展開と部落構造

次に大林部落に於ける社会関係の展開についてみよう。まず第一に基礎的社会関係からみていこう。**血縁**を基準にみた場合

家族 —— 親家 —— 親家復合　と成るが

大林部落の場合には五代前からの開拓村であり，その当時の草分け四家が発展分家したものと，途中から移住したものから成立っている。本家一分家関係は呼称としても社会関係としても存在しているが，然しその関係は身分関係や従属関係や権威を伴ったものでない。この系列は部落の社会関



係の最も基本的な成立過程である。

次に**地縁関係**をみると，

家 —— 谷内 —— 郷　と成る。谷内というのは近隣の地域集団である。例えば葬儀の場合を例にとって説明すると，ある家に不幸があったことが知らされると，その谷内の婦人は当家に集って家事のサービスに従事する。男子は葬儀の準備に参加する。谷内の人は親家の者と同様に当家の葬儀に加わる。結婚式その他の場合も同じである。このように谷内は相互扶助の近隣集団である。戦事中これが隣保班に成ったが現在はない。この谷内は親家につぐ重要な，生活全般にわたる。相互扶助の単位であるとみることが出来る。そこで先の血縁関係と今の地縁関係を組合せると

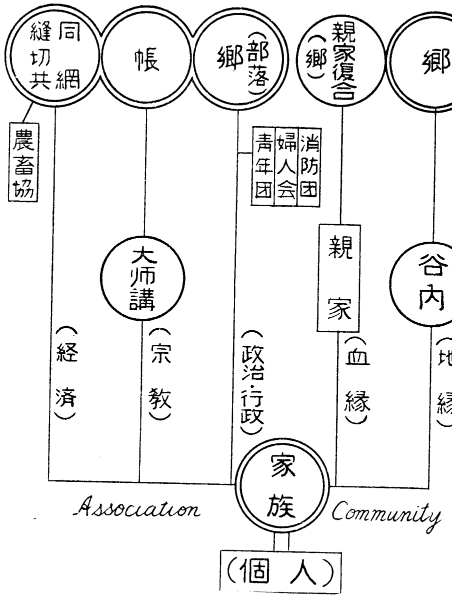
家 —— 親家 —— 谷内 —— 郷　が出来あがる。これが，一般的に見た場合の大林部落の基礎社会の関係の成立の論理であり接触交渉の範囲であるとみることが出来る。

次に機能集団についてみると，まず経済機能を果すものとして，**縫切共同網組**があるこれは，この地方独特の組織で，この部落の特徴を形成するものであるから，後に詳細に論究する。経済的機能を果すものとしては，この外に畜産組合があるがこれは殆んど問題に成らない。次に宗教的機能を果すものとしては，この部落独特の　**かくれ**

切支丹 がある。これもこの部落を特色づけるものである。これも次に取扱うのでここでは詳述しない。更に政治的・行政的・統合的組織としての

第3図

社会関係の成立



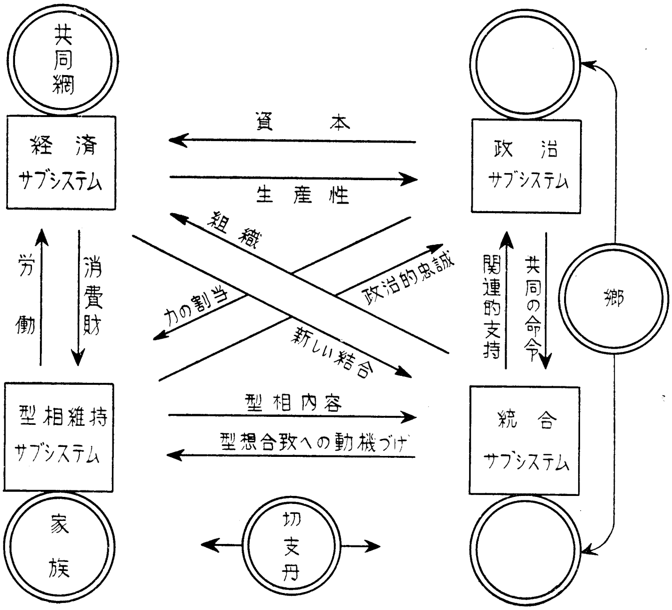
郷があげられる。これは基礎社会としての「郷」と重なり合うものである。頼母子講は資金調達の機能を果している。その他に消防団，青年団，婦人会などがある。（第３図参照）

部落の特徴と部落構造

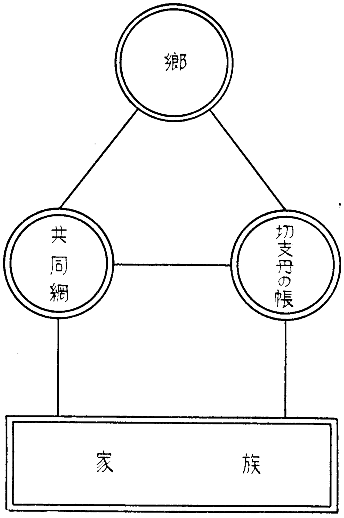
以上述べて来たところから既に明かなとおりこの部落の特徴は２つあげることが出来る。１つはこの部落が17世紀，大村領から移住した〝かくれ切支丹〟の子孫であり，現今もなお，その信仰を維持している点である。従ってこの部落の構造を明かにするためには，かくれ切支丹の信仰組織を明かにしなければならない。次にこの部落には昭和５年から共同組織（株制）の縫切網が存在している。この経営方式はこの地方独自のもので，独特の組織をもち，注目すべき運営を行っている。この組織も又，重要な組織である。従ってこれら２つの組織に「郷」及び「家族」を加えた，４つの主要な組織を分析することによって，この部落の最も重要な構造を明かにすることが出来る。

そこで次にこれら４つの組織を先に示した４つの機能的サブシステムの図式にあてはめて，部落の構造を図式的に理解しておこう。

第４図　機能的サブシステムと具体的組織の関連



第５図　部落の具体的システム構造



まず**共同網**は主として経済機能を担うものであり，**家族**が主として型相維持機能を扱うことは明かであるが，**切支丹の帳**は型相維持機能と統合機能を未分化のまま含んでいるが，その機能は極めて潜在的である。次に**郷**は政治的機能と統合的機能を十分に分化しないままでその中に含んでいる。従ってこれをパースンズの4つの機能的サブシステムの図式に適用すると，第4図のように成る[5)]。

このように「家族」・「共同網組」・「郷」・「切支丹」がこの部落の機能的要件を扱う最も重要な組織であることが明かにされたので，以下「切支丹の帳」・「家族」・「共同網組」・「郷」の順に取上げていく。（但し本稿に於いては切支丹の帳のみ）

5) T. Parsons, Economy and Society, 1961.

4　大林の宗教

大林部落のかくれ切支丹

先に述べた通り，寛政（1797）以降，大村藩から大量のキリシタン農民が五島に開拓農民として移住したが，大林部落もこの，キリシタン農民によって開かれた部落である。五島は遠隔な離島であるため，キリシタン弾圧も十分に徹底しなかったため，明治時代まで比較的純粋に信仰が守られて来た。然しながらこの時期のかくれ切支丹は「土俗化」し，「日本化」，「特殊化（地域化）」したものであった。これは正に**シンクレティズム**である。そこでこれらの「かくれ切支丹」の一部の人は明治初年信仰の自由が認められ，カトリックの伝導が行なわれても，その違いがあまりにも大きいためこれと同一化することを好まず依然としてかくれ切支丹の伝統を守った。これが，生月・五島地方に残存する「かくれ切支丹」である。

従って「かくれ切支丹」はカトリックの様式と仏教の風俗，更にこの場合には，明治以降に転宗した神道の三者が正に日本的に融合して居るのである。勿論この場合切支丹の教義様式が中心をなすものと見ることが出来るが他方神道も仏教の風俗も共に欠くことが出来ない生活の一部である。

宗教の本質からおしても風俗からみても，ここには相入れない矛盾が奇妙な形で統一化され様式化されているのである。大林部落の場合公式には神道の信徒であり非公式には切支丹の伝統を守りかっての仏教の風俗も生活の一部にとけこんでいる。宗教の複雑性と云うより，奇妙な矛盾の統一の中に我々は人間行為の本質的なものを見出すことが出来るのではなかろうか。

これまで述べて来た通り，大林部落はかくれ切支丹の村であるため複雑な宗教構造をもっている。次にこれを明かにしてみよう。（第6図）

大林部落の諸宗教

(1)　かくれ切支丹に無関係な宗教

ⓐ　仏教徒　②A・Y　③K・A　④I・S[6)]

この人達は外来者で「郷入」していないから単に行政的な部落員であって「郷員」ではない。

ⓑ　カトリック　㉔S・M　⑪T・M　（かくれ切支丹よりカトリックに転宗）

ⓒ　神道　⑩M・T

（奥さんだけ帳入してないもの　㊴Y・Y　㊿K・K）

(2)　かくれ切支丹の表面上の宗旨別を見ると。

ⓐ　神道　48戸

ⓑ　仏教　㊲I・T　㊳T・T

(3)　かくれ切支丹で大林帳に属してないもの

㊹S・U（永這より移住）

⑯M・M（前島の帳）

⑰M・M（前島の帳）

⑱A・M（前島の帳）

⑲H・M（前島の帳）

⑳H・U（前島の帳）

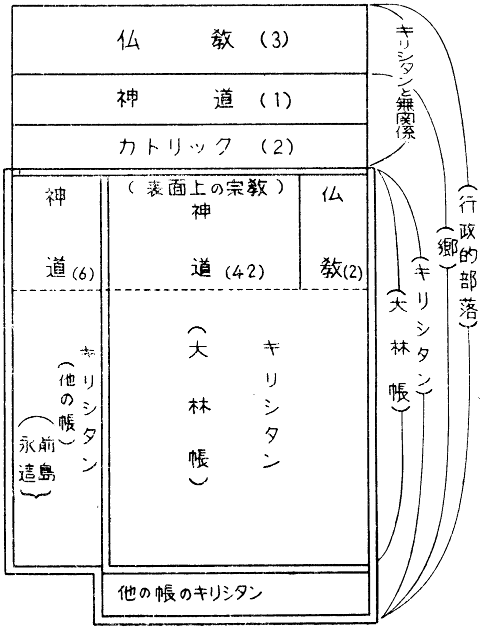
構成員数は以上の通りであるがこれを簡単に図示すれば次のように示すことが出来る。（第6図）

この図から明らかな様にこの部落の場合には核心をなすものはかくれ切支丹の集団である「帳」であるが，これは大林帳と他の帳に分かれている。これらの各帳は宗教の儀式は独自に行っているので宗教的には別箇の集団に属する。従って最も強いソリダリティを持っているのは大林帳の切支丹である。ここでは人々は我々感情をもって接触しているし最も強いソリダリティを持っている。これについで強い連帯感をもつものは大林地

区に住みながら他の帳に属しているものである。

この両者は「帳」は違っても同じかくれ宗であ

第６図　宗教構造と部落の範囲

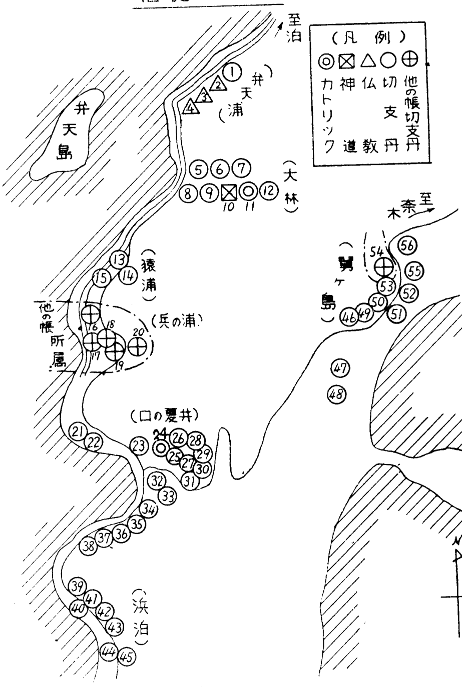


ると云う信頼感を持って居るし，宗教的行為以外は全く大林帳のかくれ切支丹と差別されることはない。これらは**切支丹の帳**を構成する。

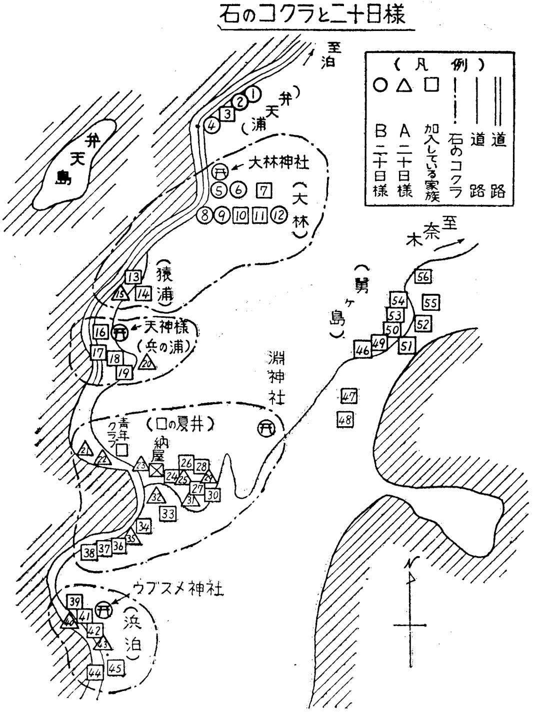
第２はかって，かくれ宗であったものがカトリックの宣教によってカトリックに転宗（帰）したキリスト教信者である。これらの人々は転宗と共に「帳」から引抜かれたが大林部落の市民権は依然としてもっている人達である。従ってこの人達は「帳」には入っていないが「郷」のメンバーシップは保持している。これらのカトリック信者とかくれ切支丹の間には宗教的行為以外には差別はないが宗旨を異にするため感情的にしっくりゆかない点がある。１と２と合せたものが**郷**。

第３のレベルはかくれ切支丹とは無関係な仏教信者であり大林部落に住んでからも日が浅い人達であり単に行政的に大林部落にいれられているが「郷入」もしていないし，正式の部落民としては取り扱はれていない。云わば「よそもの」であって部落民との同一化は殆んど認められない。１と２と３を合せたものが**行政的部落**である。大林部落の場合には共同体感情も３つのレベルをもっ

第７図　信徒の分布



第８図　石のコクラと二十日様



ていると見ることが出来る。地域分布をみると第7図の通り。

尚大林部落の信仰状況としては，以上の既成宗教の外に「石のコクラ」の信仰と，大師信仰があるその分布は，第8図に示される。

6) 以下番号は調査の際に用いた世帯番号である。

5 帳の構造

教義の変容

かくれ切支丹の最も特徴的な性格はその隠示性或は秘密主義にあることは名称の示す通りであるが，かくれなければならなかった政治的社会的条件がなくなった今日も尚かくれようとする態度には，虐げられた者の悲しみと同時に人間行動の習慣性がいかに強いものであるかを示しているといえよう。このような秘密性によって最も大きな影響を受けているのは云うまでもなく教義の保持伝達であろう。まず第1に切支丹の弾圧と神父の追放が急速に行なわれたため，教義を十分会得することは，かぎられた人達であったこと。次に客観的な形で保存することには極度の危険が伴ったため，教義を伝達することは専ら〝口うつし〟に伝える外なかった。ところが，このような口伝は長い期間を経るうちにいろいろに屈折し遂には伝説のたぐいに成っていったものもある。又この様な事情から教義の修得は客観的，普遍的基準よりむしろ個人的才能（例えば記憶力）や特殊なつながりによって伝達された。第3に厳しい弾圧のもとに於ては，何よりも先づ人間の団結が必要であるため，客観的な形で保存される場合にも，これらの規範が最も重要視されたのは当然のことであろう。以上のような事情から，個々の規範は個別的に認識され，その間に一貫した体系を求めることは不可能に近い。

五島ではかくれ切支丹のことを「ふる帳」または「もと帳」と呼ぶが，これは「帳」に由来するものである。奈留町の場合，帳には祝祭日を決定する「日繰帳」（これは**カトリック教会祝日表**に相当するといえよう）の外に「天地始之事」（聖書・聖外典が口伝によって変容したもの）も「おらっしよ」（**カトリック祈禱文**の変容したもの）も含まれている。（尚大林の「帳」には「サビエルの布」と称される古い布が入っている。これは死者にもたせて天国へ送るものである。）「オラッショ」は特定の儀式に唱えるものであるが，今日では呪文に近いものに成っており，暗誦し祈っている本人もその意味を理解していない場合が多いので，これは一般的に人間の行為を方向づける「価値の体系」を成すものとはいいがたい。例えば「オラッショ」の中には多数の祈りが含まれているが，その或る部分は「カトリックの祈禱文」との連絡を考えることが出来るが，中には全く連絡を考えることが出来ない程に変容した祈りも多い。この点については田北耕也氏の「昭和時代の潜伏キリシタン」に詳しく述べられてあるが，祈りの題目の例をいくつかあげると，(1)出立願立 (2)お初恵をさげいただくときのオラッショ (3)年忌の届方 (4)病気の支配方 (5)川の支配方 (6)道作りの御支配方 (7)雨乞の御支配方 (8)女産の御支配方 (9)タンナ日の御支配方 (10)火の御支配方 (11)血道の御支配方 (12)オソロシイトコロヲトオルトキのオラッショ (13)フネダストキのオラッショ (14)イタミ，カナシミ，ナミダノクルシミのオラッショ (15)イモツクリのオラッショ (16)49日のオラッショ (17)初の7日から35日までの勤メ方 (18)お盆の先祖祭りのフレダシ (19)四つ身祝のトドケ方[7]。

このような見地からすれば「かくれ切支丹」は明確な「教義」を欠いて土俗化した信仰であり，特殊な伝統的行為様式に堕しているといえる。かくれ切支丹は専ら自からの帳に潜沈するのみで，積極的に部外者に布教する意欲をもたない理由は正しくここにある。このような**土俗化**が切支丹の第1の特徴であると云えよう。

第2はかくれ切支丹の教義の**日本化**の問題である。既に述べたように，かくれ切支丹は，宗教的二重構造を作り出すことによって，厳しい弾圧に適応して来たのであるが，この適応の過程は云うまでもなく日本化の過程である。切支丹の日本化はいろいろな点に於て見られるが，其の最もいちぢるしい点は**祖先崇拝**の思想であろう。中世カトリシズムには祖先崇拝の思想は存在しないのにたいして，切支丹の家庭には必ず神棚と仏壇があり，大部分が熱心に祖先を祭り，お盆の供養は

盛大に行う。彼等の意識には深い祖先崇拝の思想が存在している。現在かくれ切支丹が熱心なカトリック側の復帰のよびかけに耳をかさず，むしろ他の宗教（日本の伝統的）以上にカトリック教と強い緊張関係にあるのは主としてこの切支丹のもつ祖先崇拝の思想がカトリックの教義と相入れないことに根ざしている。

教義にもとずく規範については後で述べるが，離婚の禁止や堕胎の罪のようにカトリックの伝統の外に祖先崇拝のような日本的な規範も強く結合している。彼等の教義には両者が混交しているといえよう。

帳の組織

五島のかくれ切支丹は上方と下方に分かれており，上方が四帳，下方三帳，計七帳から成っているが[8)]，ここで取り扱っている奈留町大林郷は下方の一つの帳に属している。かくれ切支丹の組織は「帳」と呼ばれている。「帳」は本来キリシタンの祝祭日を割出す日繰帳（暦）のことであり転じて特定の日繰「帳」によって運営される宗団組織そのものを帳とよぶ様になっている。

「帳」の役員は(1)「帳方」これは前述の日繰帳を保管する帳の最高責任者である。(2)次に「カンボウ」これは本来教会の世話役の名称であるが宣教師が追放されてからは神父の機能の一部を代行するものとなった帳方を助け，殊に洗礼に関する役割を演ずるものである。(3)は「宿老」これは前二者の世話係である。この三者はいかなる場合にも一緒に出席し，その宗教的機能を果している。これを概略図示すれば次の様になる。

帳方 — カンボウ — 宿老 — 一般信徒

これら三役の任期は約3年間で，宗教に熱心で儀式に通じた人が選ばれるのであるが，近来は役員になる人が居なくて困っている。現在は帳方は⑮Y・N氏，カンボウは㊷U・H氏である。三者共交替する人が居ない為，すでに3年の任期を3回も務めている。これが部落の難問題である。

「帳」のメンバーの出入は「帳入」・「帳はずし」と呼ばれる。信者の子供は洗礼を受けると同時に「帳入」したことに成るが，婚入その他で成人後に洗礼を受ける場合にも「帳入」をしなければならない。要するに「帳入」をして初めて宗教的には同類であるとの意識をもつ。したがって大林郷に属するものでも「帳入」をしていないものは，宗教的には全く無関係であるばかりでなく，日常生活に於いても，よそもの扱いされるのが実状である。婚出の時には大林の帳から「帳はずし」をすると同時に婚入先の帳に「帳入」をする。転宗の際にはすぐ「帳はずし」される。組織の変容については組織の比較研究の際とりあげよう。

儀式と役割及その変容

次に宗団の儀式活動を検討し日本的変容の実態を明かにしてみよう。

祝祭日　帳方は日繰帳にもとずいて祝祭日を決めこれを帳内に知らせ集合を開いて祈禱を行う。大林部落の主な祝祭日をあげると

(1)	1月1日	お願立て
(2)	1月4～5日	お帳開き
(3)	1月23日	とむらい
(4)	3月始め	悲しみの入り
(5)	4月15日前後	悲しみのあがり
(6)	5月23日	とむらい
(7)	7月	先祖まつり
(8)	9月23日	とむらい
(9)	11月	霜月の入り

最も重要な祝日は復活祭と霜月の御誕生日である。この日には帳の者が一家1人は必ず帳方の家に集って徹夜で祈禱する。この他にも多くの祝日があるがこの祝日には毎日曜日と共に「さわり」という特殊な作業に対する禁制がある。即ちやむを得ざる仕事以外は休み，殊に針仕事及下肥などを取扱う作業はやらない。この禁制を「さわり」とよんでいる。この村の場合には復活日と御誕生日とは漁も休むが，普通の祭日には休まない。然し三役は勿論普通の祝祭日にも一切休んで祈禱する。

帳入　次に新しくかくれ切支丹の当該宗内に加入することを帳入と呼んでいる。これは全く他宗から婚入その他の理由で他のかくれ宗に替る場合の他，他の帳から当該帳に転入する場合（これは稀）及分家する場合である。ともあれ「帳入」の式を経なければ少なくとも宗教的には我々感情をもつことが出来ない。従って仮に或る人が「郷入」

はしたとしても「帳入」をしていなければ異宗者（形式上でなく実質上の）か或は同じかくれ宗であっても他の帳に属する「よそ者」であるからどちらかである。（この場合には強い差別意識はない）。

「帳入」は帳入したいと思う者が帳方のところに申し出ると，帳方の家に三役が集まって本人と共に「帳入」の祈りを行った後，簡単な会食をして祝う。これによって宗教的にも完全に宗団と一体感を持つこととなる。

次に**洗礼**についてみよう。洗礼は出生に伴う幼児洗礼の場合と，成人後に婚入などによって受洗する場合もあるが後者は稀である。信者は出生があればすぐ三役の所に知らせる。洗礼式は早い方が良いが普通生後3日—7日位いの間に行う。〝水を授けてもらわないと人間に成れない〟。〝生れたときは獣のように角が生えているからこれを取って人間に成る〟とも考えられている。したがって別名〝つのかぎ〟或は〝みずかけ〟，〝おさずけ〟とも呼ぶ。洗礼の日取りが決まると三役は前後3日精進潔済する。女性との肉体関係も絶つ。又抱き親も同様である。女が不浄のときには前もって三役に知らせておかねばならぬ。当日は「水方」が一の座，次に「帳方」と「宿老」が居るところに抱き親が嬰児を抱いて洗礼を授ける。クリスチャンネームはだき親の名をもらう。この日は水方が主役で帳方は目付役，宿老は介添役である。抱親には出来るだけ親類（同性）の声望のある人が成る。抱親と子供の間には擬制的な親子関係が成立するので，すべて親家づきあいすることは勿論，4つのとき解帯，13のときヘコ帯，腰ひもなどを賜り，結婚式の仲人を勤めるので生涯にわたって極めて強い関係をとり交す。洗礼式が終ると4人でお神酒をいただき，その後親家一同集ってお祝いする。若し洗礼を受けないで死んだ場合には天国へ行けないので，死後洗礼を受けさせ，クリスチャンネームをつけて送る。

幼児洗礼以外の場合にも抱き親は形式的に存在している。

次に**病気**の場合には余り関係しないが重病或は難病の場合には帳方にお願いしてオラッショを唱えてもらう。殊に危篤状態におちいると三役に連絡しオラッショを唱えてもらう。このお経をあげると「治るものは早急に平癒する，寿命がきているのであれば間もなくお祈りに守られながら幸せに満ちて昇天する」と信じられている。これはカトリックの**臨終の秘蹟**に相当すると思われる。（従って急死でない限り普通三役は殆んどの臨終に立会っていることになる。）

次に**死亡**があればなによりも先ず三役に知らせる。三役は直ちに集って「しんとどけ」の経をあげる。親子親類の人が死者に御土産の布地（帳とともに保存されている布地，これがないとハライソに行けない）を入れて釘づけする。その後で神道の神主又は僧侶のところへ死亡の旨を通知する。葬式は神式或は仏式で行われる。しかしこの場合三役は隣家に陣どって神主（或は僧侶）がのりと（経）をあげる間これらの経を消すためのお祈りをしている。又会葬者も心中ひそかにお祈りをする。会葬が終った後は汐で清めて家に入り帳方，カンボウ，宿老を正客にして会食する。以上の通り葬儀は完全に二重にとり行われることに成るため，費用がかさむのは当然である。これが切支丹の生活を圧迫することに成っている。これに対する不満が存在するのも事実である。

次に**法事**は一切三役が行う。即ち神主との関係は葬式の時のみで終る。死後1週間は毎日お祈りをする。法事の供養をするのは，初7日，49日，100ケ日，1週忌，7年忌，13年忌，17年忌，25年忌，33年忌，50年忌で年忌あげとなる。

法事はすべて三役及び近い親類を呼んでお祈りをした後で三役に御馳走を出し一緒に会食をする。三役の序列はすべて帳方，カンボウ，宿老の順でありすべて帳方がリーダーシップをとるが，洗礼の場合のみ「カンボウ」が主宰する[9]。

変容の諸相，各項に於て示したようにかくれ切支丹の儀式・活動はカトリックの原型をいくらかとどめているものの，非常に大きく日本化していると云わなければならない。ここでもう一度要約してみると，まず祝日の中にも，カトリックの祝日に無関係なものがみられる。1月1日のお願立て，1月のお帳開き1月，5月，9月各23日のおとむらい，殊に7月のお盆は日本化したものとみ

ることが出来る。「洗礼」に関する考え方も「つのかぎ」の言葉に示されているように非常に土俗化している。殊にあらゆる儀式を通じて女性にたいする不浄意識が強いのも日本化の様相といえよう。

「抱親」が洗礼の一時的役割にとどまらず，生涯，擬制的な親子関係を成立させ重要な機能を果すのは，親方・子方の関係或は同族関係に類似している。

死者の年忌をとむらうことは普通カトリックには存在しない。これも日本化した姿である。

7) 田北耕也　昭和時代の潜伏キリシタン　226—240頁
8) 田北耕也　昭和時代の潜伏キリシタン　27頁
9) 田北耕也　昭和時代の潜伏キリシタン
　古野清人　隠れキリシタン

6　切支丹の規範と統制（サンクション）の機能

各種の規範

次にかくれ切支丹の規範とその統制機能について，述べてみよう。切支丹はその本質上〝かくれ〟であるから，その規範も統制も共に潜在的なものであることは当然であるが，逆にみるとかくれであるが故に強力な規範と統制が必要であるとも云える。かくれるべき条件がなくなった今日では，その規範も規制もむしろ弱わまっていくといえるが，多くの規範が残っている。

まず**一般的に期待された規範**としては　(1)かくれる為に切支丹であることを部外者に知られる危険のある行為は，すべて厳禁されることである。これは何時いかなるところでも働いている規範である。これは身内に対する場合にも原則的に適用される。例えばかくれ以外に嫁入りしたかくれ切支丹の嫁は，生涯かくれ切支丹であることを打ちあけることは許されない。逆に部落への嫁入した異宗の嫁にたいしては，かくすことは不可能に近いが，この場合には嫁もかくれに入いるのが普通である。又「祈り」をする場合にも原則として全く安全な場合をのぞき発声してはならない。文字に表わすことも，帳以外はタブーであったが最近では学習させる目的から，発声したり文字にしたりするように成った。

(2)　集会に集まることも全信者に期待された規範である。

次に**組織に関する規範**としては，

(3)　まず役職者に対する尊敬がある。役職者は部落の中で最も高い威信をもつものであるから尊敬されなければならない。路上で遭遇した場合には，道をゆずり敬意を表わさねばならぬ。殊に三役が職務遂行中は必ずこれを守らねばならない。

(4)　役職者に対する謝礼をすること。

(5)　役職者は儀礼の前後3日間寒中でも水ごりをして精進潔済しなければならない。不浄なものに一切触れてはならない。儀式祝日の前後は性的交渉も禁止される。

(6)　なお女性は儀礼には一切関与してはならない。これは女性に対する不浄観に基いているものと思われる。料理も男性が作り，女性は完全に客分として扱われる。

(7)　役職は推薦制によるが，若し推薦された場合には，拒絶することは出来ない。この規範は役職につく人が居なくなった為に出来たのであろうが。現在極めて重要な意味をもっている。

(8)　組織への加入脱退は「帳入」,「帳はずし」によってのみ確認される。必ずこの手続きを終わらなければならない。

次に**祝日，日曜**について

(9)　集会に出席して祈ること。及び安息日には下肥をとり扱ったり，針仕事はしてはならない。

教義・祈りについては，(10)　祈りをなるべく多く覚えること。**洗礼**については，(11)　生後すぐ役職者に知らせ1週間位いの間に洗礼を受けさせること。これを受けないと人間になれない。その際抱き親を必要としその聖名をもらう。

葬儀については，(12)　死者があったら直ちに役職者にとどけ，「死に届け」の祈りをあげた後公式に届けられ，神官，僧侶に知らされる。

以上各分野の規範について概観したが，これらの規範は必ずしも完全に守られているとは云えないが，ほとんどよく守られ行動の規範と成っている。

統制の機能

既に述べたようにかくれ切支丹の規範は潜在的

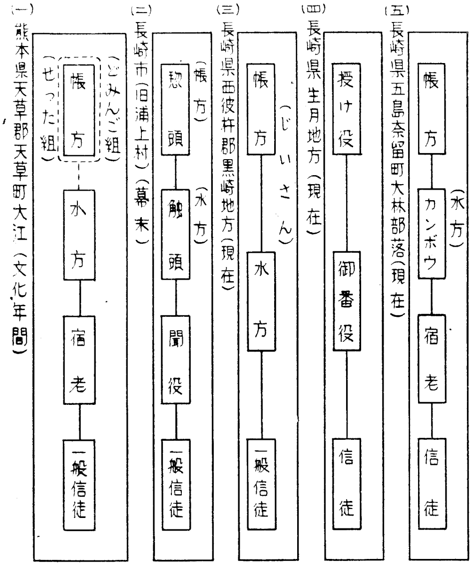
なものであるから，その規範から逸脱する場合には，公式の統制のメカニズムはもっていない。然しながら「かくれ切支丹」の規範は各人の間に深く内在化しているので，規範を逸脱した場合には，自己自身及び他人から強いサンクションを受けることになる。これは集団的レベルでの公式の統制のメカニズムではないが，個人的なレベルのサンクションとして働く。これ迄述べたところからもある程度推察することが出来るように，部落の生活は狭い地域に何重にも生活の共同が重なり合って複雑な全体を形成している為，通常の**社会的相互作用の過程に於ける個々人の消極的なサンクション**と云えども，これが重大な効果をもたらすことは当然であろう。この様に閉鎖的で共同関係が，からみあった社会では，他人から社会関係を忌避されることは，決定的な打撃を与えることに成るからである。

先にあげた規範の遵守についても程度の違いがあるのでそのサンクションも異る。先きにあげた主な規範のうち，(1)，(2)，(3)，(4)，(5)，(6)，(8)，(11)は殆んど完全に守られている。(2)，(9)については強いサンクションがあるが，除々に弱まりつつある。然し期待はなお強く残っている。(10)は必ずしも十分に守られているとはいえないが能力の個人差もあるのでサンクションも決して強いものではない。最後に問題なのは，(7)である。これは組織運営の基礎であり，宗団にとっての要件であるからサンクションも強い。A・T氏(世帯番号46，47) は役職に推薦されたが，(7)の規範を破ってこれを固辞した。これに対して帳としては特別の公式な統制を加えなかったが，それ以降，A・T氏は宗教行事には参加していない。部落の一員は「もし不幸があったらどうするのだろう。かわいそうだ。」と述べていた。A・T氏はこのため少くとも宗教的には村八分のような格好に成っている。ほそり行く信仰とはいえこの孤立化は無形の重圧と成っている。かくれ宗以外から嫁として婚入した人も暫く生活していくうちに自然のうちにかくれ宗に入るのが普通である。現在奥さんのみ帳入していないところが2戸あるが，実際上はきりしたんの風習にしたがっている。又一旦カトリックに転宗した人も郷の生活のため再びきりしたんに帰る傾向すらある。以上のところから知られるように，規範からの逸脱に対する統制は非公式なかつ正常の社会過程の中でのサンクションによるものであるが，これがこの部落の社会的統合にとっての重要な機能を果していることは十分に推察出来る。既に示したように大林部落は「行政的部落」と「郷」と「切支丹帳」の三重構造を持つが，「行政的部落」は名目的にすぎず，密接な共同関係はない。「郷」には切支丹以外の信者も入っているが彼等は切支丹の活動には一切無関係であるから，異質者の感が深い。そこでこの部落の中核で最も緊密な社会関係を展開するものは「帳」である。後に述べる共同網との関係を見ても，共同網の加入者は「帳員」のみであるところからもこのことが云える。かくれ切支丹の帳は大林部落の統合の機能の重要な部分を担っている。

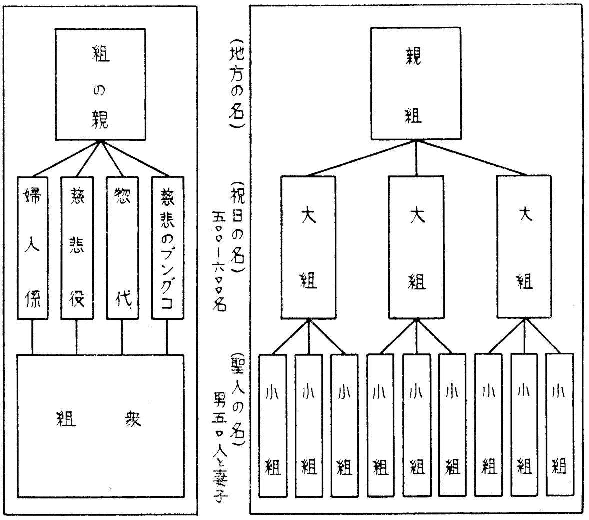
7 組織の地方的変容と比較研究

大林部落の帳の組織について検討したが，これを他の地方の切支丹の組織と比較検討してみよう。第1の例は，熊本県天草郡天草町大江のキリシタン（文化年間——現在はカトリック部落）である。その構造をみると，「どみんご」，「せつた」と名称のついた二つの組があって，それぞれ「帳方」，「水方」，「宿老」が居た。これは大林部落の現存する役職と殆んど一致する。ただ天草大江の場合には，「帳方」が次第に消滅していったため，祭日の決定が困難に成り，水方は長く残存したが既にマジシアンに堕しており，宗団としての組織も消滅し，単なる風俗・習慣となっていった。これと比較すれば現在なお大林部落の組織は強固なものである。次に幕末期の旧浦上村（現在長崎市浦上）のかくれ切支丹は元治2年のキリシタンの信仰告白とその復活によって有名であるが，この場合には幕末にいたるまで強固な組織が存在し活発な抵抗活動を展開していた。このような組織活動が行われていた為，度重なる弾圧に屈せず，信仰の火を守り抜くことが出来たのである。ただこの場合問題なのは，浦上切支丹がいち早く，信仰告白を行ってカトリックに復帰したのに反して大林部落はいまもって尚切支丹の信仰を維持してい

第9図　かくれ切支丹の組織の比較



第10図



（さんたまりや御組の役割分化）　（さんたまりやの御組の構成）

るのは何故かという問題である。これについては前にも指摘した通り，五島の場合には切支丹の組織が部落と癒着して極端に特殊化した為，明治初年のカトリックによる復帰呼びかけに対しても，容易に応ずることが出来なかった。彼等の一部には自己の正当性を確信してカトリックを邪宗としてしりぞけるという結果さえ生じたのである。その他にも，奈留島（大林）の場合には幕末から明治にかけて四周の島嶼にくりひろげられた凄惨な迫害を伝え聞いた為，いよいよ自からの殻にとじこもったこと，又ジャパナイズした切支丹の伝統とカトリックの信仰内容があまりに相違した為復帰出来なかったこと，或は部落や宗団との政治的・経済的利害関係から更にカトリック「神父」との感情的なもつれ等の問題があるが，いずれの場合にもその底に宗団の「グループエゴイズム」の問題が横たわっている。

次に長崎県北松浦郡生月町にはやや異った形の切支丹がある。ここでは御神体を守る「御番役」と洗礼を授ける「授け役」があって儀式をとり行う。更に「御番役」の下には多数のコンパニヤという組織があって，ここではこれを単位にさまざまの活動がなされる。以上を図示すれば第9図のように成る。

尚これらの組織の原型の一つであると考えられる，1618年と署名されたさんたまりやの御組の構造を示すと第10図の通りである[10]。

以上述べたところから明かなように，切支丹の組織は，本質的には類似しているといえるが地域的にかなりの相違がみられる。

10) この外イエズス会によってミゼリコルジャの組，サカラメントの組，聖母のお告げの組，「イエズスの聖名の組」「聖母被昇天の組」「至聖聖体の組」「聖ミカエルの組」及びフランシスコ会によって，「フランシスコ・コルドンの組」，「ロザリヨの組」「セスタの組」「クルスの組」等々があった。

8　む　す　び

本稿は最初に述べたように，かくれ切支丹部落の研究報告の一部である。既に示したように，この部落の基本的なサブシステムは四つの組織即ち「かくれ切支丹」・「家族」・「共同網」・「郷」である。ここで取扱ったのは主として第一の「かくれ切支丹」の研究である。「共同網」や「郷」の構造については次の機会に取扱う予定である。したがって，部落の構造はこれら四つのサブシステムを明かにしたのちにはじめて論究されるべきであろう。然しながら本稿を一応独立してまとめるために，「かくれ切支丹」と他のサブシステムとの関係を大略のべておく必要がある。

まず**かくれ切支丹**と**家族**との**関係**は非常に密接なものである。本来日本に於ける（中世）カトリックの活動は家族を単位に為されていたといえるが，殊に弾圧にさらされて潜伏するように成ってからは，家族単位の信仰と成らざるを得なかった。信仰活動のあからさまな表現は，例え肉親の間に於いてさえ，原則的には，タブーとされているので，結局，信仰や祈りの所作は家族の中に於ける非公式な社会化のプロセスの中で形成されることに成る。又この過程の中で切支丹の価値がパーソナリテーに内在化して行く。したがって「帳」は「家族」によって支持されていると同時に家族の価値体系を支えている。

次に**帳**と**共同網**との関係についてみると「共同網」は株制であるが，この株に参加しているのはすべて「帳」のメンバーである。「共同網」は「帳と密着している。共同網は他の部落にもあるが，概して云えば「かくれ切支丹部落」の共同網の方が他宗の共同網よりも好調であるのもかくれ切支丹の団結心に或る程度関係があるといわれている。「帳」の重要な祝日には「網」も出漁しない。「帳」は「共同網」の窮極的な支えと成っている。又網組は「帳」の最も有力な物的な援助者である。

帳と**郷**とは密着しているといえよう。「郷」の会長は帳の「カンボウ」を勤めているから帳の最も重要な組織者である。彼は帳の役員であると同時に郷の役員をかね，町会議員を勤め，郷の有力者とみなされている。郷には若干の異分子，例えば「帳入」していないものも含まれているが，その基礎をなすものは云うまでもなく帳のメンバーである。「帳」と「郷」は密着している。

このように「帳」は他の三つのサブシステムと密接に関連しながら郷の構造を形づくっている。

（未完）

付記　本稿は文部省科学研究補助による「かくれ切支丹研究」の一部である。調査研究にあたって，八木佐市，増田庄三，山口素光の諸氏から多くの教えをいただいたことを改めて感謝したい。